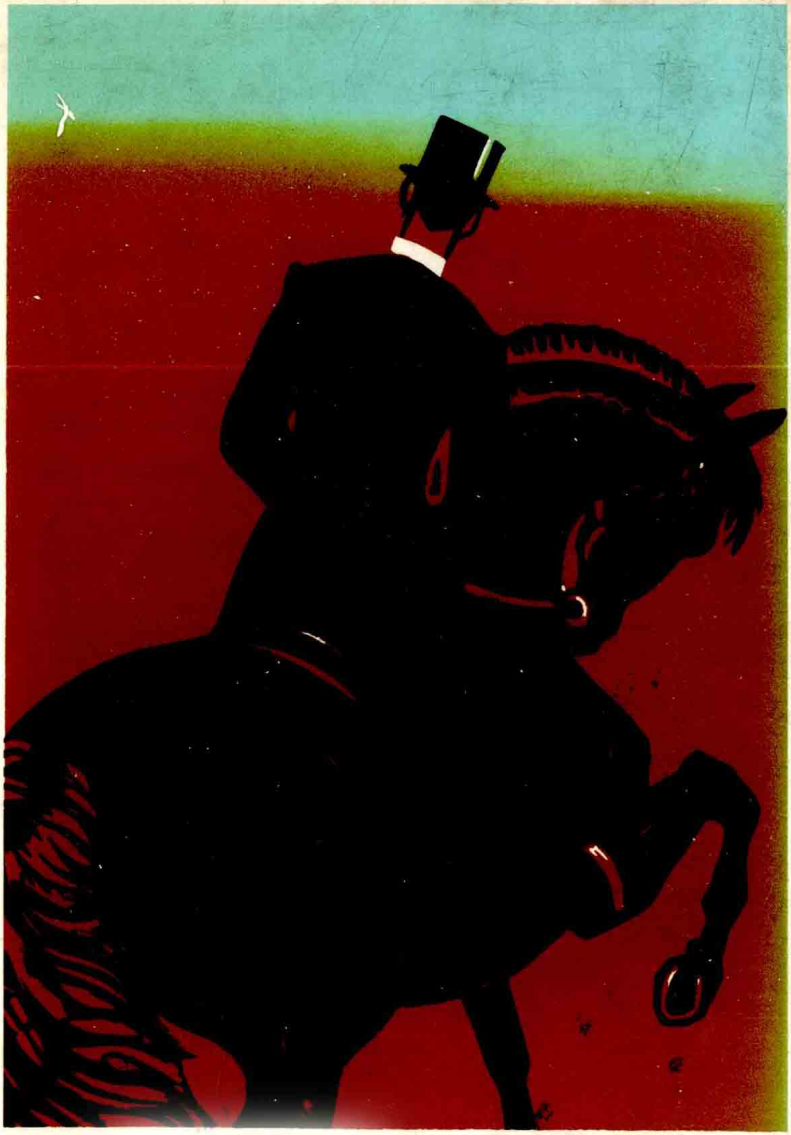
言葉は運動する

事件の現場

蓮實重彦



事件の現場

一九八〇年一二月二五日第一刷発行

●著　者——蓮實重彦

●発行人——原雅久

●発行所——朝日出版社

東京都千代田区西神田三—三—五　電話〇三—二六三—三三二一　振替東京四—四六〇〇八

●印刷・製本—凸版印刷株式会社

0390—180231—0039

©1980　Shigehiko Hasumi

言葉は運動する

事件の現場

蓮實重彦

事件の現場

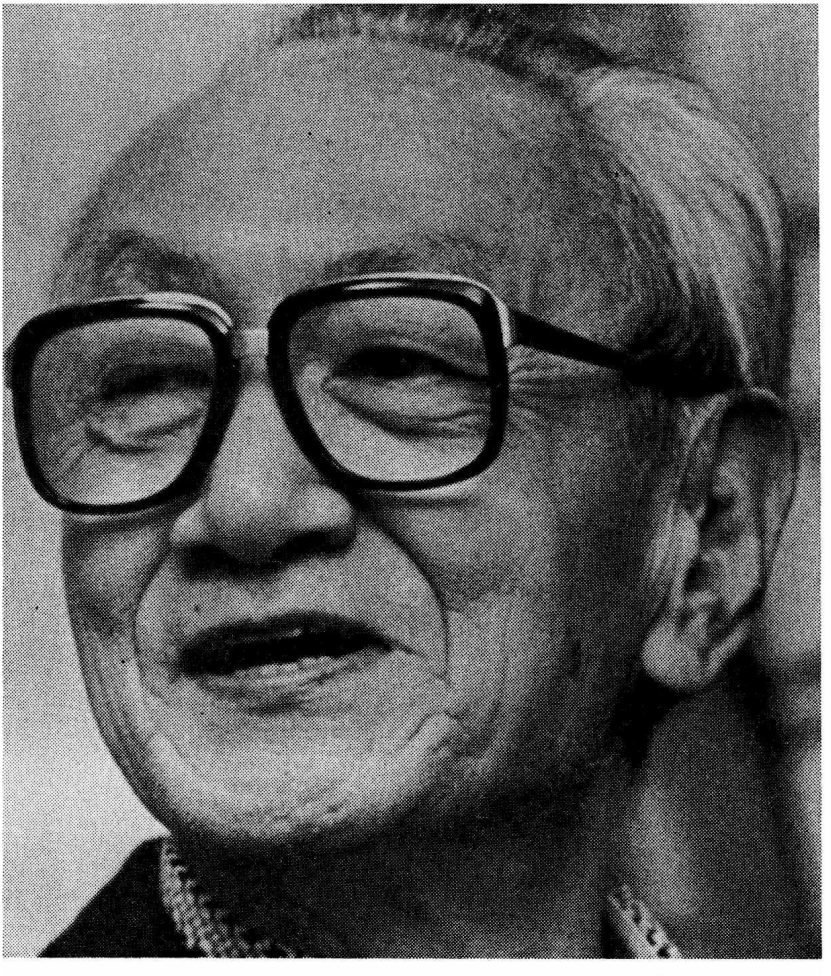
此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

『地獄の黙示録』から　大岡昇平＋蓮實重彦　7
『小説の理論と実作』　中村光夫＋蓮實重彦　53
批評にとって作品とは何か　吉本隆明＋蓮實重彦　87
文学・言語・制度　柄谷行人＋蓮實重彦　141

マルクスと漱石　柄谷行人＋蓮實重彦　187
制度としての物語　中上健次＋蓮實重彦　243
彼自身による弁明　311
あとがき　364

『地獄の黙示録』から

大岡昇平＋蓮實重彦



大岡――やっと蓮實さんの『映像の詩学』その他を読ましていただきました。よく見ていらっしゃるのに驚き入るばかりで、こっちはこの四、五年、目が悪いので、数えるほどしか見てないので、とてもお相手はできないはずですが、いろいろ御高説をうかがいたいと思い、出て来たわけです。

蓮實――いやいや私こそ、是非先生のお話をうかがいたいと思って出てまいりました。先生の御連載「成城だより」は、毎月楽しく読ませていただいておりますが、例の「昴」の『地獄の黙示録』の特集を読まれて、まだまだ寒い時期に渋谷東宝まで見におでかけになったと知って感動いたしました。

大岡――『地獄の黙示録』はあまり評価が分れてるので、つい浮かれ出しましてね。「文学界」の「成城だより」に書いたあと、もう一度70ミリを見ました。有楽座へ行って、自由席で後半から、一回半見ちゃったわけだ、おしまいまで。あれはカンヌ祭へ出したエンディングじゃないと、筋が通らないですね。

蓮實――だと思います。もっとも、未編集ということで出品されたようですが。

大岡――サイゴンへ帰って来るんではだめで、ウィラードが病気の王様カーツを殺して、王様になって居つくんじゃなきゃ。

蓮實――そうですね。王様になったウィラードが、また船に乗ってしまったんではいけない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大岡――そうしなきゃアメリカ人は承知しないんでしょうね。ハッピーエンドになって、とにかく帰ってこなきゃ（笑）。行ったっきりになっちゃね。それから、ほかの国では、最後に爆撃で憂さばらししなくちゃならない、ということでしょう。カンヌ試写会では……

蓮實――カンヌで上映されたのは庭の階段の上にウィラードが出てきて、群集の前に立つところでおしまいということのようです。

大岡――そうですね。それじゃなきゃ筋が通らない。

蓮實――試写会で見た70ミリ版では、そのあとで船に乗るわけです。また35ミリ版で最後にクレジット・タイトルがついたことによって、ずいぶん混乱を招きましたね。

大岡――そうです。いや、もともとあのコッポラ監督はあんまり好きじゃないんで、ぼくは『ゴットファーザー』はニューヨークで見たけど、途中で出ちゃったくらい。

蓮實――ああ、そうですか。

大岡――面白みがないんだ。ああいう監督は日本で昔から伊藤大輔がいた。いま黒澤ですか。なんか大がかりでやるけども、本当は面白みがない。こんどはあれでも、コンラッドの『Heart of Darkness』のつっかい棒がないと成り立たない。しかし「The Hollow man」というT・Sエリオットの短い詩をはじめて知ったんですが、『荒地』より面白かった。『荒地』はエズラ・パウンドの干渉で圧えつけられたところを、のびのび歌っている。……ぼくはこんど『地獄の黙示録』のおかげでずいぶん勉強しました（笑）。T・Sエリオットはむしろ嫌いで、論文と『荒地』しか読んでなかったんですが。彼は、コンラッドが好きだったんですね、そういう甘いところがあったんだ。

批評は伝統といって斜に構えているけれど、「空ろな人間」には、コンラッドをエピグラフにしてますね。クルツかカーツか、中野好夫の『闇の奥』の翻訳の問題もあるし、すっかり浮かれ出したのですが、すこし浮かれすぎて、蓮實さんに、あれは河を遡る映画だ、と言われると一言もない。私はほんとは前の戦争で行ったフィリピンの実写として見たと書いといたので、救われた気持です（笑）。あれはシエラマドレに入って行く川で、ルソン島の北のアパリから入るカガヤン川でないと、あんな広い河口はないはずだから。しかしプログラムをよく読むとラグナ湖の南で撮ったって書いてある。〝ラグナ湖〟っていうのは、フィリピニストには辛いんですがね。「ラグナ」とは「湖」ってことで「ラグナ・デ・バイ湖」っていわなきゃいけないんだけど、日本占領軍が〝ラグナ〟と湖の名を取って、最初にそう言っちゃったから通称になっちゃって、そういわなきゃ、日本人には通じないんだから。

蓮實――いや、しかし先生が二度ごらんになったと知って改めて感動いたしましたね。かなりの映画好きでもなかなか二度は行かない。映画評論家たちの書くものを始めとしてほとんどの映画的ディスクールというのは、一度見たときの印象だけで終っております。

大岡――水草の大きな群れが浮いている。あれは淡水湖でなければあり得ない状態で、そう気がつかなかったのが、くやしくて……。70ミリがどうなっているかっていうのが気になって。マーロン・ブランドの演技はだめで、どうしようもないんですけど、彼のふんする殺される王のシルエットの足の方に犠牲の水牛の頭が出るカットがあるでしょう。そんな暗示的手法の積み重ねですね。終りの部分は、「ホーラーメン」の

詩を読むところがだめですね。ありゃね。暗誦してなきゃなんないんですから。チラチラっと本に目を落すぐらいじゃなきゃ。あんなに高校生が詩を読むみたいな姿勢ではいけない。つまり、あそこで老王の表情がひとつも出ないから、あの詩とカーツとの関連がはっきりしない。それはむしろ、コッポラの演出の問題かも知れないでしょうけど、ブランドはどうせコッポラのいうこともききゃしない。スターってのは自分で芝居しない人種ですから……。

蓮實――ほとんど動けないのですね、あの人は。

大岡――殺されるところは代役だっていうし。そう、河の上流の、岸の山が高くなって来るところが、いいですね。

蓮實――はあ。実は私も二度見ておりまして、最初は、先生がお見えにならなかった70ミリの試写、そのあとで、35ミリを一度見て、それからきのうの午後、最後のほう四十分ぐらいを、もう一度見てまいりました。

大岡――あなたも三度見た(笑)。じゃあ、それだけ満たされるものがあるんですね。いろいろイメージのサインが、すこしずつ含まれているんですね。なにかあることはあるんだ。

蓮實――いや、見れば見るほど、これまで自分は何を見ていたんだろうと驚いてしまいます。映画とは忘れるために見るものなのかと思われるほどです。しかし私もこの映画は大変すぐれたものとは思いません。とくに70ミリで最初に見たときなど冒頭の三十分くらいは、あまりに下手くそなので、すんでのところで席を立つところでした。船が出て来て河を遡行しはじめると、まあ退屈はとけてほっとしました。画面に河が

写って、その上を船が滑ってゆくのは、やっぱりいいなあと思ったわけです。二度目に見たときは苛々しながら見ていたときに見落した細部が見えて来て、それに画面が小さいものだから、ずっと親しみが持てました。

大岡――あの爆発がないと面白くない、あれは憂さばらしでね(笑)。あのなかで、まあダイアローグ取り寄せて、マッシュルーム……そういえばありましたよね。

蓮實――そういわれれば、左のほうにフッとこうなんか……。

大岡――ちょっとね、へんなあがり方をする火があって。ルネ・クレールの『映画をわれらに』という本があるでしょ。あのなかにおしまいのタイトルバックで、スクリプターなんとか助監督の名前まで出すのは、もうやめろって、彼は主張したが通らなかったそうですが、それをこんどコッポラは、うまく利用してますね、音を消した爆発をダブらせて。しばらく時間をおいてから。

蓮實――一度まっ暗になるわけですね、爆発の前に。ですから、ほんとにあとからつけたという感じがいたしますね。

大岡――その間合いを、私はウィラードがサイゴンまで帰る時間と感じました。そういう点は大変しゃれてますね。

蓮實――そうですね。しかし、タイトルってものがまったくない映画もあります。『地獄の黙示録』の70ミリ版もそうですが、その前にゴダールの『勝手にしやがれ』が全くタイトルが出ない。不思議なのは、みんながそれで驚くんじゃあなくタイトルを見たつもりになってるんですね。

大岡――映画のヌーベルバーグは、あなたのお説では、二十代への郷愁であり、先祖返りであって、大したこともない。けっきょくそのあとに、例の大作主義、宣伝主義がきて成功しちゃったんで、映画の観客はテレビに食われちゃったんだけども、でも、作品の質、イメージのメッセージの出し方では、まだ暫く開発すべき領分があるかもしれない……。でも、こんどの黒沢の『影武者』は予告編だけ見ただけで、下らなくて……しかしこれはいけない、予告編しか見てないんだから。

蓮實――私もいちおう二度見たんですけれども、『影武者』はやっぱり駄目です。

大岡――あ、それで安心した。夢の場面が予告編に出てくるでしょう。バックの雲らしいあの色の加減なんてのは、『二〇〇一年宇宙の旅』のおしまいの方の色のまねなんですけど。あれはキューブリックのLSD体験を出したんで、むしろ「私映画」だって評があったそうです。当時、息子がニューヨークにいたもので……LSDの幻覚ってのは、LSDは最初は禁止じゃなかったからアメリカの観客なら半分ぐらい経験していて、日本へは入ってきて麻薬扱いになっちゃったからね。夭折した女性の絵描きにすこしいいのがあるけれども。『影武者』の色は中途半端で、ものほしげで、いただけなかったな。

それから、イメージは内在してるそうですよ。ウソ発見器の装置を利用して実験したら、その結果が出た。あれはたしか汗線の電圧変化をはかるんですが、頭の中で、

何かこうイメージを思い描くと、それから電気抵抗に出るわけですね。するとイメージは脳だけの現象ではなくて、身体的な全的現象であるってことになる。映画鑑賞は身体的現実で……。蓮實さんが評論をいろいろお書きになるだけ、映画をたくさん見られる。その身体でないと持たないわけ……。わたしも子どものときから、文学は文学で悩みながら、映画は映画として見ていた。ダグラス・フェアバンクスのアクロバットは娯楽のつもりで見ていたつもりだったけど、時代のヒーローであり、必然的ヒーローだったってことが、蓮實さんの本でよくわかりました。マック・セネットの海水着美人の魅力も……。そのうちチャプリン、スタンバーグのリアリスム、ルビッチュの喜劇も思い出したが、ルネ・クレールなどのフランスのセンチメンタリスムが入ってくるんですけども、イメージからイメージのつながるイメージ論理というものが存在するってことを、われわれは生活して来たわけですよね。ただそれが言語化されるかどうか。映画評論は蓮實さんを除いては日本には存在しないといってもいいんで、新聞、情報誌の映画評論家ってのは、配給会社の興行商策と一つ穴のむじなですから。そして絵画論でも、イメージには言葉にかえられない部分がありますから。

蓮實――そうですね。先生がこの映画ごらんになるきっかけは、日本の文学者たちがあれに関して、いろいろ矛盾したことを書いてる、それをお読みになったってことですか。

大岡――ええ、まあ、そうです。

蓮實――それ以前に『地獄の黙示録』をひとつ見てやろうというお気持は……。

大岡――それはありました。コンラッドの『闇の奥』ってのは、ぼくの好きな作品で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com